

「育ちをみつめる」



(2020年3月)

保育教諭 豊田 舞

改めて「育ち」とは何かを考えると、その言葉の意味には、まず『成育の状態』、次に『育てられ方・成長期の環境や教育』というものがある事を知りました。子ども達にとっての環境や教育は園での生活の事であり、その中に保育教諭も含まれているという事が十分に理解出来ます。私は、昨年度のクラス(1歳)を持ち上がり、今のクラス(2歳)の子ども達と2年目の日々を過ごしてきました。この2年間を通して子どもの育ちを実感する瞬間がたくさんあったので振り返ってみます。

ちょっぴり我が強くておこりんぼうなAちゃん。昨年度初めて担任した私の事を警戒していました。距離を取りながらも関わりを持とうとする姿もあり、徐々に思いを交わしながら仲良くなっていた頃、私がある時注意をした事をきっかけに近づくに近くなりました。関わろうとすると私を避け、注意をすると激しく怒り涙し、また関係は振り出しに…。こうしたことを繰り返しながら徐々に友だちを介してまた私と関わるようになり、とても慕ってくれるようになりました。年度が変わった2年目、周囲の大人や友だちが少し変わった新しい環境。自我の芽生えと共に頑固な姿も増えて、涙すると気持ちの切り替えにとても時間がかかりました。楽しく過ごす園生活ですが、思いが通らず泣き出す事もしばしば。そんなAちゃんの涙が止まるスイッチは決まって私で、声をかけると泣きやむようになりました。彼女にとって日々一緒に過ごす私の存在が大きくなっていると分かった出来事でした。自分で気持ちを切り替える力を身に付けられるように、あえて距離をとり涙する姿を見守った事もありました。「先生も話がしたい」と気持ちを伝えるものの中々聞き入れてもらえないこともありましたが、徐々にその姿も減ってきました。成長と共に気持ちに折り合いをつけられるようになり、泣き続けるのではなく話を聞く事が出来るようになったのは、出会ってからもうじき2年になる最近の事です。気持ちが崩れ涙が止まらないAちゃんを、心を鬼にしてあえて手を出さず見守っていると、自分で涙を拭き「泣くのやめたよ」と言いに来ました。しっかりと抱きしめて「泣くだけじゃだめだったね、よく自分で頑張ったね」と言うと、悲しそうだった表情が一気に晴れたことを鮮明に覚えています。この2年間でAちゃんは、素直になるという事・自分の気持ちを押し通すだけではダメだという事に気付き、他者に目を向けられるようになりました。乳児期の幼い子ども達はまだまだ自分が中心の世界ですが、集団で生活をする事がどれ程の育ちに繋がるかを実感させられます。大人の愛情を受けながら周囲に目を向けて関わりを楽しむようになり、その中で思いが通らない難しさを知りながら、時には我慢も必要だという事を知っていきます。その育ちを促すのは身近な大人の存在です。Aちゃんにとって、私は甘えられる人で、わがままを言える人で、思いをぶつけられる人だったのかもしれませんが、衝突することもありましたが、今では私のことを大好きだと言ってくれ、毎日会っているのに、毎朝1年ぶりの友だちに再会するかのように喜んでくれます。「昨日も会ったね」と笑って言いながら、内心私もこっそり喜んでいきます。この子の長い人生のうちの2年という短い間ではありましたが、身近な大人の存在意義、関わり方での育ちの変化を実感する事が出来ました。私にとって子ども達は一番小さな友だちなので、子ども達からしたら楽しい相手というばかりでなく、揉める相手にもなります。大人が本気で関わる事が子ども達の人間性を高めていけると考え、これからも子ども達の傍で一緒に成長する大人でいたいと思いました。

